

ゲノムから解釈できる情報とその医療応用

◆ブラックコーヒー好きや、自然を愛する心を生み出している遺伝子

2021年12月、米国のノースウェスタン大学の研究者は、ブラックコーヒーを好む原因は遺伝子にあると発表した。英国のバイオバンクと、米国の過去の調査で得られたゲノム情報をまとめて、コーヒーなどの嗜好と遺伝子の関連を調べた結果、カフェインの代謝が速い遺伝子を持つ人はブラックコーヒーを好むことが明らかになった。この遺伝子を持つ人は、ダークチョコレートも好む。

22年2月、シンガポール国立大学などの研究チームは、自然を好む傾向は、部分的に遺伝すると発表した。英国の1,153組の双生児の調査結果に基づき、自然と接する機会の多さを、一卵性双生児と二卵性双生児で対比することによって、自然を好む傾向が、生活環境ばかりでなくゲノムにも影響されることを示した。

これらの研究が示すように、ゲノム情報、さらには、個々の遺伝子の比較によって、個人の好みまで理解できる時代になった。こうしたゲノム情報をヘルスケア領域で活用することによって、個別化医療が推進されている。

◆IBMがWatson Healthの中核をFrancisco Partnersに売却

22年1月、米国のIT企業IBMは、Watson Healthの中核をなすデータやソフトなどを米国の技術系投資企業Francisco Partnersに売却することに合意したと発表した。Watson Health事業は黒字化することなく、売却額も安値とされている。

IBMの「Watson」がクイズ番組で歴代チャンピオンに圧勝したのは11年のことであった。そのビジネスへの応用として、IBMが着目したのがヘルスケア領域で、15年にWatson Healthを立ち上げた。Memorial Sloan KetteringやMayo Clinicなどの有名な医療機関と連携して、ヘルスケア領域への人工知能応用の先進的な事例として注目された。その後、機能を増したWatson Healthであるが、ゲノム情報に基づく個別化医療は、元々、目的とする機能の一つであった。

近年、Microsoft、Amazon、Google、Appleなども、ヘルスケア領域に積極的な投資を行っている。その中で、Watson Health事業の失敗は、ヘルスケア領域におけるビジネスモデル構築の難しさを示した事例となった。 【戸潤一孔】